説教20201129テモテ二4:1-8 　讃美歌　20 21-509 94

「待ち望み、宣べ伝え」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　待ち望むことと、宣べ伝えることか、どっちが先でしょうか。待ち望むという全くの受け身か、宣べ伝えるという積極的な能動か、どっちが先でしょうか。本日の聖書箇所では述べ伝えることが先になっています。又聖書の箴言には「待ち続けるだけでは心が病む。かなえられた望みは命の木。」と記されていて、この両方が必要であります。これを考え出すとニワトリが先か卵が先かの話になってしまいそうですので、避けますが、今日は待降節に入ったということもあり、待ち望むことからお話ししたいと思います。

　主が来られるのをひたすら待ち望む、ひたすら待ち望むという待ちの姿勢は、私たちが人生の様々な場面で待ち望んでいることよりも、はるかに深いものです。それが「ひたすら」という言葉で言い現わされていますが、主がやってこられるのは、いつになるのか全く分からない、今ここに来られるのか、あるいは私がこの世を去って、次の世代でやってこられるのか、まったく見当がつかないのであります。それは何故かといいますと、主がやってこられるというのは、まったく、私たち人間の思いを超えた、驚くべき、恐るべき出来事だからです。不可思議な出来事だからです。私たちは、自分がおもいもよらなかったものやことをプレゼントされた時のほうが、予想できていたプレゼントをもらうよりもうれしいものです。ただし、今日のような、物語性の薄い世の中に生きていますと、人間は想定外のプレゼントをもらった時に、何とも言えない喜びを感じるよりも、えも言えない恐怖のみを感じてしまう場合もあるようです。それでもなおサプライズのプレゼントなどを演出して、計り知れない喜びを演出しようとするのですから、話はなかなかややこしいのです。

　とにかく、わたしたちは、日常の生活で失われつつある、物語性を取り戻していくのが先決かと思います。

　私たちは、この世を、事実だけによって、生かされ歩まされているのではありません。必ず、何らかの物語によって生かされています。何かそこに物語がなければ、私たちは一歩も前に踏み出すことはできません。

　思い返せば、４-５０年前は「愛情物語」という映画や、「小さな恋の物語」という漫画なども広くみんなに知られていて、世の中は、今よりは物語性に満ちていたように思います。

　それに比べて、今は世の中から物語性が失われようとしています。ラインという通信手段があって、それに参加しているある友達の返信が、数分遅いという理由だけで、その友達がそのグループから排除され、絶望してしまうという事態も多く起こっていると聞きます。数分間もまてないとは、なんと物語のない世界なのだと悲しくなってしまいますが、あなたは決して絶望する必要はありません。私たちには、この聖書という主なる神からの最高の物語が用意されていますので、私たちは、この聖書に書かれてある物語によって、新たな一歩を歩みだすことが出来ます。

　この待降節、アドベントは、主の降誕をひたすら待ち臨むシーズンです。ヘロデ王という悪しき王様が支配した、そのお暗き時代に、その社会で最も弱く、虐げられていた羊飼いたちの上に、星の動きによって、主イエス様の誕生が告げ知らされました。羊飼いたちは暗闇の中で光る光に望みを見出し、ベツレヘムの馬小屋の主イエスの誕生の場所へと導かれるのですが、その道行きの一瞬一瞬は、主の降誕をひたすら待ち望む、えも言われぬ喜びに満ち満ちていたのではないでしょうか。すべてが不思議な出来事でした。星の光に導かれ、自分たちを救ってくれる、王様に会いに嬉々として、出かけていき、馬小屋に入ってみれば、そこには飼い葉おけに寝かされた赤ちゃんと、貧しい夫婦がいるばかりでした。でも、羊飼いたちは、その情景が、天使から聞かされていた通りだったので、羊飼いたちはすぐにその貧しい夫婦の赤ちゃんが、私たちを救ってくれる本当の王様であるとすぐに信じることが出来ました。

　主なる神からの物語は私たちに、思いもよらない、限りない喜びをもたらしてくれます。私たちは、イエス様のご降誕という出来事を、こんなに暗い時代にあっても、いつもえも言われぬ喜びに満たされながら、待ち望み続けるようになります。ヘロデの時代の羊飼いたちのように。

　このように私たちの思いを超えた、サプライズの喜びをもたらしてくれる、主なる神からの物語を信じ続けるには、一方で、そこに、或る確かさがないと、続かないというのもまた事実ではないでしょうか。信仰における、確かさ、とは一体何でしょうか。羊飼いたちが、馬小屋で、貧しい夫婦の赤ちゃんであるイエス様が、まことの救いの王様であると信じることが出来たのは、前もって天使たちの預言があったからでした。そこに確かさがありました。羊飼いたちの時代には、日常生活において、天使たちの存在がまじかに感じられるような物語性があったのかもしれません。残念ながら今の私たちが、そのように天使たちをまじかに感じることはなかなか難しいようです。すべての人が天使たちを感じることが出来るわけではありません。

　そこで、少々語り口を変えて、今の私たちが主を待ち望んでいることの確かさについて語ってまいりたいと願います。

　フィリピの信徒への手紙には「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」という有名な聖句があります。私たちはキリストが統治する新しいエルサレムが現れるのを、待ち望んでいます。さてここでこの「わたしたちの本国は天にあります」の本国という言葉を、より親しみのある故郷という言葉に置き換えて「私たちの故郷は天に在ります」と語るほうが、私たちの身につまされてくるのではないでしょうか。「私たちの故郷は天にあるのですよ、みんなで一緒にその天の故郷へ入れられましょう」と説くほうが、伝わっていくかもしれません。明治時代の牧師さんにはこのような語り方をする方が多くみられました。それには理由がありまして、それは明治時代の中ごろに、国を挙げての故郷探しの時代が訪れたからなのです。

　故郷という言葉は万葉のころからありまして、短歌などでも用いられておりますが、明治時代半ば、１８８０年代よりこの故郷という言葉は、さかんに語られるようになりました[[1]](#footnote-0)。私の出身は鳥取藩ですよ、とか私は高知県の出身ですとかいう、それぞれの郷土を懐かしむ心情が拡大されていき、いわば、それぞれの故郷物語が物語られていったのです。阿山という東大生は、東大に入学して東京での生活を始めたときに「故郷の土産」[[2]](#footnote-1)という本を出版して故郷の人々に、その本をお土産としてプレゼントしたようです。その本の出だしを読みますと、当時の国を覆いつつあった故郷に対する人々の思いを推し量ることが出来ます。「故郷の土産」「人だれか故郷を愛せざらん。故郷には最愛なる父母のいますものを。人誰か故郷を慕わざらん。故郷には最愛なる兄姉（あにあね）のいますものを。郷（さと）を愛し、郷を慕うは、人情の常。あえて怪しむべきに在らざるなり。」

　皆さん、これを読んでそうだそうだ、とうなずく人もおられるかと思いますが、それはこの時代に形作られた、このような故郷物語が、その人のうちにまだ働いているからです。

しかし、この東大生の文章を、冷静に読めば、そこにかなり強引な決めつけや、断定が数多くみられることが明らかになります。例えば、このように安易に、全ての人が自分の故郷を愛していると断定できるでしょうか。中には、様々な事情で故郷を飛び出してきて、故郷に対して距離を置きたいと思っていた人も多くいたはずです。「郷を愛し、郷を慕うは、人情の常。」という風に安易に断定できるでしょうか。

これは一東大生の文章にすぎませんが、この明治の中頃の時代には、このような感じの故郷物語が、多くの人によって語られ、形作られていったのです。そしてこのようにそれぞれの故郷を愛するという叙情が津々浦々まで浸透することによって、日本という国の統一感や一体性が形作られていったのでした。

　つまり今の日本に続く、この故郷物語というのは、明治時代に人々によってかなり強引に作られた、物語だったのです。

　しかしこの故郷物語には最初の設定からして、人々をばらばらにする要素が含まれています。それはどういうことかといいますと、それぞれの人の故郷は、それぞれ違うという事です。鳥取県人の故郷と、高知県人の故郷とは、同じ場所ではありません。違う場所であります。ですから、この故郷物語をよいものと信じて、この物語を生きても、最終的には結局私たち人間はバラバラだという思いにしか至らないのではないでしょうか。この物語は、せいぜい都会で出会った二人が、たまたま同じ故郷を持っていたという事で、しばし喜び合うといった程度のことに過ぎないのです。

　でも、この故郷物語はなかなかしつこく、何回かの消滅の危機を経ながらも、「ディスカバージャパン」などどいう新しい言葉で語りなおされて、今迄、語り続けられているのです。

　このような事情をわきまえますと、今、「私には本当の故郷がなくて、私は全く孤独だ、」と思い込んで絶望しておられる方がいたとすれば、そのように絶望する必要は全くないことが知らされるでしょう。

　私たちはむしろ積極的に、明治時代に人の手によって作られたこの故郷物語を捨て去っていきたいと願います。何も恐れることはありません。なぜならば私たちには、主なる神からまことの故郷の物語が与えられているのですから。

「わたしたちの故郷、本国は天にあります」この聖書が語る故郷、本国は、一つの場所を指しています。それは、ヨハネの黙示録では、新しいエルサレムと呼ばれています。新しいエルサレムは一つしかありません。すべて信じる人たちは、その一つところに集められ、主イエスの永遠の祝福のうちに活かされるようになるのです。

　それで私たちは、主が来られるのを、ひたすら待ち望んでいるのですが、ではそんな私たちを支え続けている確かさとは、何でしょうか。それは聖書が物語られていることの確かさです。それは人が作った物語でもなければ、人を結局バラバラにする物語でもありません。主イエス様ご自身が私たち人間のところに降誕されて、口づてに物語られた物語であり、人々を、最終的に一つ所に集めようとされる物語であります。そこには、神の救いに至る知恵、神の愛のご計画があります。

　人は、この世を、事実だけによって、生かされ歩まされているのではなく、必ず、何らかの物語によって生かされていると申しましたが、それゆえ、一つの物語から、別の物語に乗り換えるときには、苦しみを耐え忍ばねばならないこともあります。三節から「そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。」と記されておりますが、ここで意味する作り話とは、具体的にはどういうものか、皆さん気づいてこられたのではないでしょうか。

　私たちは、隣人に聖書を物語るとき、忍耐強く、十分に教えていかなければ伝わりません。そしてこの私たちの忍耐強い活動を支えるのも、又、聖書に物語られている神の救いに至る知恵、神の愛のご計画の確かさなのです。

お祈りします。

天に居ます私たちの父なる神よ、今日は、この降誕節第一主日に、私たち兄弟姉妹をも前に集めてくださり感謝します。

あなたの救いの光が、貧しい羊飼いたちに届けられ、そして今、私たちのもとにもありますことを感謝し、あなたをほめたたえます。どうか、私たちが喜びをもって、あなたの再臨を待ち望むことが出来ますように。

あなたの愛のご計画、あなたの知恵の確かさに支えられて、私たちが、み言葉を、隣人に物語っていくことが出来ますように。

世の中は、夜明け前の闇夜の中にありますが、私たちがさまざまな作り話のほうにそれることなく、あなたが物語ることに、確かに寄り頼んでいくことが出来るようにしてください。

今、新型コロナウィルスは再び勢いを増し、ことにヨーロッパにおいて多くの方が罹患され、亡くなられています。どうか主よ、あなたがそれらの方々を慰め、癒してください。私たちも、それらの方々を覚えて祈り続けることが出来ますように。私たちを孤立させようとする悪しき物語から私たちを解き放ってください。

この別府の街もクリスマスに向けて、祝福の時を迎えようとしています。市民の一人一人が、与えおもてなしする喜びのうちに生かされ、やがてキリストの喜びを知ることが出来ますように

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されています

1. 成田龍一『「故郷」という物語』1998　ｐ.18 [↑](#footnote-ref-0)
2. 阿山居士『故郷の土産』1899 [↑](#footnote-ref-1)